

2017年 南雲版 びっくり10大予想

九星波動研究家

南雲紫蘭

マーケット参加者には御馴染、元モルガン・スタンレー証券投資ストラテジストで、世界最大の投資ファンド運用会社ブラックストーン・グループ副会長バイロン・ウィーンによる毎年恒例のびっくり 10 大予想 (10 surprise predictions)。彼はびっくり (surprise) の定義として「一般に 3 分の 1 の生起確率しかないと思われているが自分には 50% 以上である事象」としています。

この予想が始まった当初は、如何にも“起こる筈がない”事象が列挙された上に、それが結構な確率で予想通りに発生したので人気を博しましたが、その後は平凡なびつくりが、予想に反して本当に起こらない、という凡庸なものになってしまいました。

やはりアナリスト、ストラテジストとはいえ、メインストリームに近づくにつれ大胆な予測は出来ないという事なのでしょう。これを他山の石とし、私なり大胆な“びっくり”を考え、昨年本誌に掲載しましたが、「トランプ大統領誕生」など、驚くほど予想的中。おかげさまで今回、2017年版を作成することに相成りました。とはいえ、今回これほど過激なびっくり10大予想を作る人物は著者以外いないものと自負しております。

以下が、その予想となります。

予想①：懐疑と不安の中NYダウは大暴騰後急落へ

世間の期待と不安が入り混じりながら先月第45代米国大統領に就任したドナルド・トランプ。歴史上最低の支持率でスタートしたトランプ政権ですが、この政権がこれから打ち出す予定の政策は、理論的にあらゆる意味で株高を招くと思われます。先ず「財政出動」によって好景気とインフレが出現します。「保護貿易」によって国内では需要が沸騰するでしょう。米国への利益寒流とバブル期待。どれも見て、米国株式が「下がるはずがない」という好条件です。現段階では期待と不安、いや、ハッキリ言うと懐疑の目が強くなっている彼の政策ですが、これは日本における1980年代以来のバブル政策です。マーケットはこれを織り込み、秋に向けて50%以上暴騰するでしょう。即ち、秋口までにNYダウは2万8,000ドル。そこから25%急落して2万ドルすれすれまで行く。そんな歴史的ジェットコースター相場となるでしょう。

予想②：保護主義が席捲。21 世紀のブロック経済が始まる

トランプ大統領の打ち出す保護主義政策は現代人から見ると如何にも非主流のように見えますが、実際 19～20 世紀の大半の時代、特にこの頃の米国、英国、日本、ドイツなどは、軒並み保護主義政策の下で産業が強化されました。一定の破壊的なほどの重課税でなければ、適度にコントロールされた保護主義はむしろ節度ある成長に貢献します。その意味では、米国を中心とする北米（もちろんメキシコを除く米国とカナダ）と、コモンウェルス（Commonwealth：英連邦）と呼ばれる、英国を中心とした旧英国植民地の主権国家間での国家連合は、今後世界の二大貿易圏として繁栄していくのではないのでしょうか。

予想③：米英新時代—コモンウェルスと北米自由貿易圏による大同盟—

実はトランプ大統領の“真の狙い”はこれではないでしょうか。コモンウェルスと北米とが手を組むことで、EUを遙かに上回る規模の国際貿易圏同盟が誕生します。米国が新英米同盟+1（イスラエル）の再構築に努め、EU（特にドイツ）と日本に対しては冷淡—よくて是々非々のスタンス—な姿勢をとることで、非同盟諸国は地政学的にも微妙な立場となるでしょう。

予想④：世界的紛争を放置

ある意味トランプ大統領の姿勢は非常にクリアといえます。端的に言えば、第二次世界大戦時の米英同盟とイスラエルをサポートするというもの。その一方で、旧敵国であるEUや日本に対し

ては「対ロシア、対中国で役に立つならば金を出させながら利用する」というスタンスです。ロシアとは取引し、中国に対しては非常に強く出る。では、その他の紛争地域に関してはどうでしょうか。「コストは嫌い」なビジネスマンであるトランプ大統領は「紛争は放置」を決め込むでしょう。彼はアフリカの民族問題にも関心はないと思われ、世界は警官なき混乱状態に陥ります。

予想⑤：新十字軍結成でトランプ大統領の支持率が史上最高へ

問題は中東です。トランプ大統領の関心事はこの地域だけではないでしょうか。彼が打ち出す圧倒的な親イスラエル主義は、サウジアラビアと米国との関係を冷却させ、イスラム対キリストー、いわば「新十字軍」として米国が登場する可能性があります。これは中東に新しい危機を招く可能性があります。イスラエルの危機に関しては — まるで聖書に宣誓した就任式のように — イスラエルと組んで「新十字軍」あるいは「21世紀の十字軍」が出現し、米・イスラエル共同軍による中東侵攻が起きる可能性があります。これは世界を驚愕させますが、同時に、戦争は常に米国を結束させ、大統領の支持率は大幅上昇となるでしょう。

予想⑥：韓国が政治・経済的に崩壊、東アジア危機勃発

90年代は東南アジア一、即ちタイ、インドネシアなどの過剰債務国からの資本流出による通貨危機がきっかけでした。2017年は、政治が既に機能不全に陥っている韓国が通貨スワップが日米と結ぶことができず、資本流出、政治機能不全という最大の危機に瀕するでしょう。この危機は、北朝鮮の武力侵攻リスクを招くと同時に、中国の介入も引き、いよいよ東アジアの軍事・政治・経済状況は混んとして来るのではないのでしょうか。

予想⑦：地政学リスク増大で円急騰

米国の景気回復、英国の貿易同盟などで、2017年のドル／円相場は緩やかな円安でスタートするものの、年後半からは韓国通貨危機、地政学リスクからアジア通貨の緊急逃避先として政治経済、軍事的に安定している円が急騰します。つまり、円は一時130円台から再び100円台と目まぐるしい展開となるでしょう。

予想⑧：EU崩壊が現実味

2017年、EUは選挙の年です。あらゆる想定外のことが現実になるでしょう。フランスではマリーヌ・ル・ペン大統領が誕生。ドイツではメルケルが退陣、欧州の至る所で極右勢力が強大な力を得ます。恐らく、欧州ではドイツだけが民主的かつ移民にフレンドリーであり続け、スペイン、イタリアなどはどんどん右派に流れてしまいます。いよいよ政治経済的な統合は幻影であったことになり、ユーロは再分裂を前提としたユーロ分裂 — つまりマルク一強になりそうです。問題はその過程において、想定外な — つまりマルクを中心とした — ユーロ高が起これると思います。

予想⑨：デフレが懐かしいー世界的インフレへ

世界的に労働需給はひっ迫、しかも新興国に工場を作っても、せっかくの競争力は関税で消えてしまいます。あるいは関税ではない形での輸入制限を実施するにせよ、とにかく新興国のモノは先進国では売りづらくなります。21世紀初頭の意趣返しとでもいべきブロック経済の繁栄と各国でのコストプッシュインフレの高進が出現することになるでしょう。

予想⑩：FRRは最低4回、3%を超える利上げを実施へ

F R Bは想定外のインフレ、さらには戦争による財政の悪化、ブロック経済による海外輸入品の高騰などによって市場金利は天井知らずとなります。株価の暴騰も相まって連続利上げを毎月行う羽目になり、秋口には50ベースの利上げを複数回行う状況に追い込まれます。そう、さすがの株式暴騰も、このF R Bの連続利上げによって一巻の終わりとなるのです。

以上、どれも当たらないほうがよさそうな10大予想ではありますが、ひとつ余興程度にでも楽しんでいただければ幸いです。

テクニカル

フラクタルの正念場

先週は週明けからトランプ口撃、「ドルが高すぎる、日本が円安誘導している」一何かと文句ばかり垂れる大統領だ。市場が自分の発言やツイッターで高下するのを楽しんでいるように見える。何時までも市場は気紛れトランプ発言に付き合うことはないと思うが、相場が反応している間は仕方がない。

先週の円高は株安にも影響を及ぼしたが、下げトレンド形成には至っていない。調整の範囲内である。

さて、1995～96年のフラクタルを昨年末から見てきたが、細かく見ればチャート上、96年2月頭に若干の押しが入っていることに注目。これが先週の相場であったと見ている。ただその後もう一度上昇して高値をつけた後、3月中旬まで続落波動が96年版フラクタルが指し示した絵図。

これに従うかどうかは個人の自由だが、最低でも今年の高値更新を次の上昇波で達成させるとみているが、フラクタルの2月の反発は僅か3営業日。これでは心もとない。懸念は1月27日の高値19,486が5日の高値を更新できずに二番天井で終わったことだ。テクニカル的には弱気トリガーとなっている。

今週の押し

弱気ダイバージェンス

先週末の金融市場は通貨と株式とで明暗が分かれる。1月米雇用統計の結果は市場予想よりも良い結果となり、加えて金融規制を見直す大統領令にトランプ新大統領が署名したため、米国株式は銀行株を中心に上昇。NYダウは2万ドル台を回復した。しかし、米ドルは上記の要因よりも先月27日に署名された「テロ懸念国」からの入国制限等を盛り込んだ大統領令と、それを巡る混乱に対する不安感から買い場を見出せないでいる。年明けから続く下落は、まだ反転の兆しが見えない。

逆に、ユーロ／ドル相場は先週も上昇が続いた。2月2日、相場は1.0827まで上昇して年初来高値を更新する。この相場の先述に関しては2週間前から次の通り述べている“黄金分割から見た昨年11月高値からの下げ幅の修正高水準は、38%訂正水準で1.0707±0.0043。50%訂正水準で1.082±0.0057。62%訂正水準で1.087±0.0070と算出される。…上記どれかの値位置まで上昇し、その後どこまで下げるかが、今後の相場

今週の主な予定・経済統計

2月6日(月)

・フィラデルフィア連銀総裁、講演

2月7日(火)

・米3年債入札(240億ドル)

・12月の米貿易収支

2月8日(水)

・米10年債入札(230億ドル)

2月9日(木)

・米30年債入札(150億ドル：入札合計は620億ドル規模)

・米週間新規失業保険申請件数(前週は24.6万件)

・シカゴ、セントルイス両連銀総裁、各地で講演

2月10日(金)

・日米首脳会談

・昨年12月の米卸売在庫

・EU財務相理事会

2月11日(土)…満月(月食)

・2月のミシガン大学消費者信頼感指数・速報値(前回は98.5)

・フィッシャーFRB副議長、講演

2月12日(日)

・独大統領選出

それを打破するためには最低でも27日の高値更新が条件。それに失敗すると、フラクタルの2月続落局面の想定せざるをえない。それまでは今週前半までは上伸場面を想定、週後半に下げが始まり、2月の安値を週足引け値で更新すれば、弱気を支持する強力なトリガーとなる。ただトレンドは依然として上昇であることから、フラクタルの下げが到来しなければ、強気姿勢を続ける。



基調の指針を決めるのではないかな。…今週の段階で買いポジションは幾ばくか利食いしておいた方が良くと思われる。…目安としては先述の50～62%訂正水準までの上げが想定されるが、そうなった場合は更に幾ばくかの利食いを推奨”。先週、相場は50%訂正水準まで到達したので、更に利食いが出来たかと思う。

た、先週の高値形成場面で15日スローストキャスティクスは1月の水準を超え切れておらず、これは弱気ダイバージェンスの関係。従って、目先この相場は急落するのではないかな。仮に先週2日の高値が目先のピークであった場合、下値目標として1.0641±0.0022が設定される。これは1月3日の安値1.0341からの上げ幅の38%訂正水準に相当。更にこの値位置は現在のサポートポイントである23日、及び69日移動平均価格共リンクしている。更にオーバーシュートしても50%訂正水準は1.0584±0.0029。先週も“1.05付近で再度利食い分を買い直す戦略が望ましい”と述べたように。ここは格好の買い場になると筆者は思う。従って今週は、残りの買いポジションの損切り水準を1月3日の安値(1.0341)以下の引け値に置き、しばらく様子見してみるのが良いだろう。



今週の相場風林語録

相場は気の世界【3】

夏目漱石「道草」に、心は沈んでいた。それと反対に彼の気は興奮していた。気と心が違うことを記している。心は本来、内に向かって閉ざされている。逆に、気は外に向かって目に見えない触手になる。

今週の**九星★波動**

全部実行するのか？

南雲 紫蘭

NYダウが2万ドル、ドル円も115円回復とトランプ相場は続いているかと思えた前週末の相場でしたが、なんとトランプ政権が怒涛のように出した大統領令の中でも、最も強烈な反発を受けたものが出ました。そうです、トランプ米大統領は27日、イスラム圏7カ国の市民の入国禁止や、難民受け入れの一時凍結等を盛り込んだ大統領令に署名、即時実行に移したのです。

国内外では大規模な抗議活動が相次ぎ、大統領令の合憲性を問う訴訟等、その是非が司法の場で争われる可能性も出て来ています。

米大統領選以降、米国株は過去最高値を相次いで更新してきましたが「選挙では言っていたけれども実行はしないだろう」と相場参加者がタカを括っていたトランプの選挙公約は、企業にとってプラスとなる政策だけではなく、全てを実行に移すつもりらしいのです。

相場指南道場

トレーダーあすなろ物語 (381)

中原 駿

金利には上昇期と下降期、それと安定期がある。

それがすべて同じであれば、リスクをとる側には面白くない。しかし、金利の動きには特別な癖というべきものがあつた。

それは金利上昇期は短い、その幅は大きく、金利下降期は長くその幅はゆっくりとしているのである。そして金利安定期にはいわゆる長短金利差がじりじりと効いて来るのである。

こうした特性からこの銀行の戦略は極めて明快であった。

キーポイントは「金利は低下傾向をたどる時間が長い」「長短金利差は必ずある」の二つである。

金利の上昇は危険だが、その期間は短い。そのため、上昇期はそのタイミングを計り、常に天井に備える。

第六感のボトムはまだか



テクニカルアナリスト 葛城 北斗

悩まし気なレンジの動き

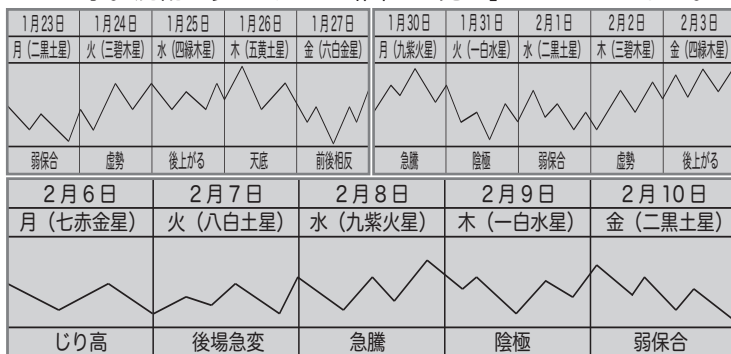
先週末の米雇用統計は良好な内容であった。就業者数は市場予想17万5,000人に対して22万7,000人の増加と大きく上回った。しかし、失業率は4.8%と0.1ポイント悪化。平均時給は26ドルと前月比0.03ドルの増加にとどまり、前年同月比でも2.5%増と前月の伸び(2.8%増)から鈍化、昨年8月に並ぶ5カ月ぶりの低い伸びとなった。この影響から市場はインフレ見通しが弱まり、利上げ観測がやや後退したと判断。ドル円は下落、ユーロドルは上昇した。

ドル円相場は1月18日に112.53の安値を付けた後、前の安値を僅かであるが漸続的に更新、サブサイクルのボトムは確認できていない。今週は昨年11月9日安値から13週目に入るが、サイクルは延長されている。あるいは、まさかのシナリオだが、1月18日の安値でボトムを付け、次の日の115.61でサブサイクルの天井を付けたとの見方も浮上している。確か昨年2月のサブサイクルもこのようなパターンであった。ボトムを付けた後、天井までは3日の上昇であった。

しかし1日間の上昇はさすがに短すぎる。サブサイクルは延長していると考えられ、過去、最大15週までの延長したケースはあるが非常に稀だ。フォーメーションとして昨年2月のパターンは気になる処だ。今回のように弱保合いを続けた後、底割れして急落した経緯がある。この時、レンジ下限である110円前後を3度試した後、4度目のテストで底抜けとなった。

通商協定の見直しや輸入品への関税は選挙公約の柱でしたが、これらは多国籍企業に打撃となります。移民制限がもたらすビジネスへのリスクは、今回の入国制限を受けたグーグルの親会社アルファベット等、企業による反発で明らかです。

トランプ大統領と専門知識を左程持たない側近は大統領令の草案を単独でまとめ、関連機関にはほとんど前通達をしなかったとの事。混乱は少なくとも当面は「売り」となるでしょう。



金利低下は長いので、ポジションは常に長期の債券をロング(買う)ことから始めるのである。

具体的に言おう。ここに運用するべき資金があるとする。もちろん、そのままキャッシュで長期債券を買ってもいいのだが、この金融機関はレバレッジをかけるのである。

いわば、このキャッシュを証拠金として、レバレッジをかけるのだ。

証拠金に対するレバレッジは状況によるが、基本は3倍から10倍程度である。

レバレッジは先物であることもあればデリバティブを利用することもあった。

先物は債券先物と短期の3カ月もの先物の組み合わせである。債券先物をローリングでロングする一方、短期は売りまたは中立にする。ロールオーバーは常に長期金利を受け取り、短期金利を支払うのだ。

110円を下抜けるとこの動きが確認される。

それまでは先週述べた2014年版のレンジ相場を想定する。15日スローストキャスティックスはトリプル強気オシレーターダイバージェンスを示している。先週は次の通りコメント「(相場が) 安値を更新したとしても、サイクルボトムの時間帯は過ぎているので、やや延長型サイクルのボトムとして判断され、トリプルボトムとして認識」。

今週以降、保合い下抜けか、レンジ上限に向けてドルが上昇するかでサイクル位相が決まる。本欄は強気で対処しているが112~113円台を買った投資家は110円割れの引け値にストップを置き、今週、反転上昇に転じれば113~114円台(1円抜け)では利食いしておきたい。



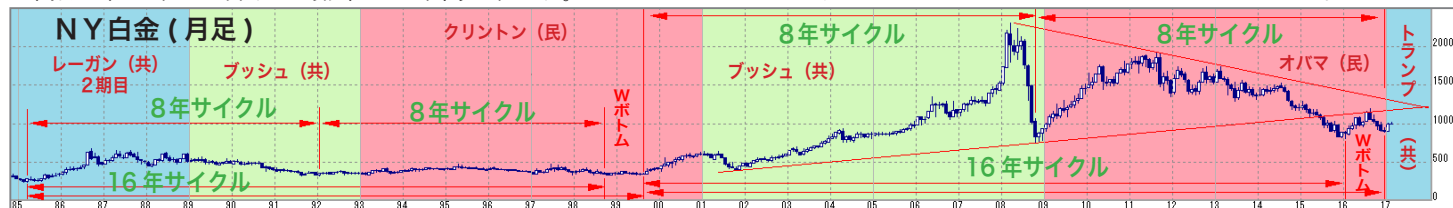
サイクルだけ話します。

— メリマン・サイクル理論 備忘録 —

【第26回】NY白金のサイクルについて(1)

先日、ラジオNIKKKIさんの番組「マーケット・トレンド」に出演させて戴き、昨年10月の当欄でも指摘した「米大統領選16年サイクル」と関連して、現トランプ政権と1985年のレーガン政権2期目の為替・株相場の相似性、簡単に言うところからドル安/株高の流れになる可能性について話しました。

当連載をお読みの方は既にご存知の通り、現在ドル指数は日柄的には天井形成場面です(1月天井の可能性も)。米ドルが安くなるならドル建て商品価格は高くなる、と言う見立ては、昨年11月のNY原油の回で解説しましたが、株高なら工業関連の商品は他よりも上昇する可能性がより高まります。



メリマン通信 — 金融アストロロジーへの誘い —

木星が来るぞっ

2月6日から木星逆行が始まる。2週間前も“株式の節目と木星に関連する天体位相との間には相関性がある”と述べたが、この付近でNYダウが2万5000台を回復したという点は興味深い。

木星関連の天体位相は、往々にして株式相場にポジティブに働く事が多い。そしてこの惑星は、満月にして月食である11日に太陽とトライン(120度)の関係になる(日本時間では12日)。トラインは天体間の関係が良好である事を意味し、相場ではトラインが発生している付近で、長短を問わず節目となる高値をつけている事が多い。米国株式は先週末から反転上昇している、ジオコスミック的にはこの時間帯に向けて上昇し、そこから下落に向かうのでは、という仮説を立てる事が出来る。

逆に、木星と相性が悪いのが金である。ここ最近の傾向として、木星に関連した天体位相発生場面ではネガティブに働きやすい。

高く仕入れて安値で投げる投資家から
脱却してアクティブブシニアになろう!

四半世紀以上、投資の最前線で活躍してきた
「プロ中のプロ」が語る現在の株式市場とは

- ◎マイナス金利時代に株を持続
けて成功する秘訣を解き明かす
- ◎10倍になる株など豊富な実例
で銘柄発掘の心得を公開!
- ◎株式投資の実践編として〈有望
銘柄掲載〉!



株で資産を蓄える

～バフェットに学ぶ失敗しない長期株式投資の法則～

S・アダチ&カンパニー
代表取締役社長

足立 真一 著

発行: 開拓社 定価: 1,296円(税込み)

また先週も“2月2～12日はヘリオ射手座ファクター。金とユーロの急騰急落の特異日。今週木曜日前後での相場の急反転に注意したい。積極派と違い、慎重派にはポジションの減玉を推奨する”と記述したように、今週はこのファクターと木星逆行の開始日が重なる。更に、ファクター終了日と太陽・木星トラインの時間帯が重なるという点にも注目したい。

メリマン氏は常々、このヘリオ射手座ファクター発生時ではおよそ7割の確率で金やユーロの急上昇と関連性があるとしているが、筆者はここ最近の傾向として、この期間中は上昇するよりも下落するの方が多いと見ている。NY金も、ユーロ/ドル相場も、先週2日に年初来高値を更新した。従って、両相場はこの2日高値をひとまずのピークとして、少なくとも今週末から来週頭までは下値を指向するのではないかと筆者は見る。

もしこの通りになった場合、星回りから見た次の反転ポイントは2月下旬であろう。ここでは火星関連の天体位相が集中し、そこから3月の金星逆行に突入するというラインナップである。

WEBサイトより一足早く、1週間分まとめ読み!!

今週のアストロロジー info

- 2月6日(月) 木星逆行開始
- 2月7日(火) 為替市場の加速的な動き
- 2月8日(水) 逆張り対処
- 2月9日(木) 株式市場、マド開けは追従
- 2月10日(金) 小休止
- 2月11日(土) 相場に王道なし
- 2月12日(日) 紛争、テロ激化

FORECASTS 2017
レイモンド・メリマン著
2017年の相場を読み解く究極の書

2017年は相場の節目か?
星を読む。サイクルを読む。市場を読む。
Feel the star. Feel the cycle. Feel the market.

フォーキャスト2017
アストロロジーとサイクルで
2017年の相場を読み解く究極の書
レイモンド・メリマン 著 秋山日輝香・投資日報編集部 訳
投資日報出版発行 8100円(税込・送料別)

簡単・便利な『投資日報オンラインショッピング』もご利用ください。
お問い合わせ・お申込みは: 投資日報出版(株) <http://www.toushinippou.co.jp/>
〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町3-12-11 GRANDE 人形町6F 電話: 03-3669-0278 FAX: 03-3668-4444